

TV番組における「国際理解」形成の論理と方法

—— 社会認識形成機能としての「学校社会科教育」の固有性をめぐって ——

吉川 幸男・藤永 佳宏*・藤本 大介*・松田 朋範*・松野 直江*

A Study on the Methodology of International Understanding in TV-programs

Yukio YOSHIKAWA, Yoshihiro FUJINAGA*, Daisuke FUJIMOTO*,
Tomonori MATSUDA* and Naoe MATSUNO*

(Received November 6, 2001)

キーワード：社会認識、社会科教育、国際理解、TV番組

はじめに — 視点と方法 —

「社会認識を通して市民的資質を育成する」ことを社会科教育の目標概念として掲げる
とき、このことは学校における意図的な教育だけが担っている目標ではないことは明らか
である。たとえばテレビ、新聞などのマス・メディアは、その報道を通して視聴者、読者
の社会認識を形成し、一定の「市民的資質」を形成しているとみることができ、小説
や映画、ドラマなどフィクションにしても、そこに登場する人物は一定の社会的役割を演
じ、一定の社会的メッセージを発する以上、読者や視聴者の社会認識及び「市民的資質」
に影響を及ぼすはずである。

このような学校外の非意図的な「社会科教育」に対して、「学校社会科教育」の固有性
はどこにあるのか、を追究しようとするとき、その方法的視座としては三つのアプローチ
が考えられる。第一は、こうした非学校的メディアによって行われる非意図的「社会科教
育」を「教材」として利用することによって「学校社会科教育」を構築しようとするアプ
ローチである。たとえば「TV視聴を活用した社会科授業」「社会科における新聞の教材
化」「映画を活用した社会科授業」などという教材構成論的な視座がこれにあたる。¹⁾ 第
二は、こうした非学校的メディアによって行われる非意図的「社会科教育」を、「学校社
会科教育」の「前段階」として位置づけ、子どもたちがこのような非学校的メディアを通
して社会認識を形成してきたという前提に立って「学校社会科教育」を構築しようとする
アプローチである。ここでは、「メディアの影響を受けて形成した社会認識にいかにか
働きかけ、いかに揺さぶるか。いかに変えてゆくか」というように、社会における無意図的
教育結果に対する不可欠な教育的働きかけとして「学校社会科教育」を位置づける。第一の
アプローチが非学校的メディアを「学校社会科教育」に取り込もうとするのに対して、第
二のアプローチは「学校社会科教育」で非学校的メディアに対抗しようとする。非学校的
メディアに対するこのような「取り込み」と「対抗」という両極のアプローチに対して、

*山口大学大学院教育学研究科社会科教育専修

「共存」「並存」をはかる第三のアプローチが構想される。ここでは非学校的メディアによって行われる非意図的「社会科教育」の社会認識形成機能と、「学校社会科教育」の社会認識形成機能との、それぞれの固有性を明確にし、両者の適切な関係のあり方が探られる。

本小論の課題は、上記第三のアプローチをとった場合における、非意図的「社会科教育」の社会認識形成の論理を「学校社会科教育」との対比で析出することである。これには、事例的な限定を必要とする。このため本小論では、非意図的「社会科教育」の事例としてTV放送の番組を取り上げ、そこで形成される社会認識内容に関しては、「国際理解」を取り上げる。このような事例を選定するのは、TV放送というメディアの形式が一定の放送時間を必要とし、その時間経過に応じてさまざまな情報資料を組み入れることで成り立っている点で「学校社会科教育」と形態的に類似していること、「国際理解」という主題が番組の内容としても取り入れられやすく、この要素を内容に取り込んだ番組が比較的多いの対して「学校社会科教育」の目標概念としても取り入れられやすいことからである。

I. TV番組における社会科教育としての「国際理解」の理解内容

「国際理解」という概念の適用範囲は広い。およそ外国の事象を取り上げれば何らかの意味で「国際理解」に関する内容が表出される。学校教育において「国際理解」が「総合的学習」の脈絡で取扱われやすいのは、この概念の広義性によるものである。²⁾

これに対し、社会科教育の脈絡、すなわち「市民的資質」なる目標概念に方向づけられた「国際理解」を問題にするときは、まずはその理解内容が検討されなければならない。TV番組ではさまざまな形態で外国の事象が取り上げられるが、それらは外国の社会の何を取り上げ、視聴者に外国の社会をどのようにとらえさせようとしているのであろうか。外国の事象を取り上げたノンフィクションの番組から数例を無作為に抽出し、その放送内容を大まかに概観すると、そこには社会科教育の視点からはきわめて重要な二つの対立軸を見出すことができる。

①「人」の理解と「社会」の理解

番組の中には、外国のある地域に生活する特定の個人を取り上げ、その人物の日常生活ぶりを追跡したり、その人物の意図や行為を物語的に追いかけてながら、その人物をとりまく社会の実態に迫る、という構成をとっている番組がある一方で、外国の文化や社会の仕組みそのものを伝えることを中心におき、個人はその文化や社会を担っている要素として位置づけている番組がある。この違いは「人がつくる社会」と「社会に規定される人」という社会認識形成上重要な両側面のうち、両極が顕著に表出されたものとして注目される。「人」を取り上げている番組は、「社会」とのどのような関係を伝え、「社会」を取り上げている番組は「人」をどのように取扱っているのかが問われることになろう。³⁾

②静的な理解と動的な理解

番組の中には、外国のある地域の「地域構造」「社会構造」「文化の構造」など「構造」的側面を中心に内容を構成している番組がある一方で、外国のある地域が直面する問題を取り上げ、その問題に人々がどのように取り組み、どのような解決がはかれようとしているかという「問題解決」や「発展」的側面を中心に内容を構成している番組がある。この違いも社会認識形成上重要な両側面であり、やはり両極が顕著に表出されたものと考えられよう。⁴⁾

以上二つの対立軸をもって、外国の事象を取り上げている番組を以下の四種に区分する

ことができる。(右図1)

A. 異文化体験番組

この種の番組では、外国のある地域における衣食住など生活上の諸事象を取り上げ、社会や文化のあり方が放映される。

B. 地域問題番組

この種の番組では、外国のある地域における社会的問題が取り上げられ、それに対する取り組みぶりが放映される。

C. 人物物語番組

この種の番組では、ある外国のある地域において社会的問題に取り組む人物が取り上げられ、その人物の問題への取り組みが放映される。

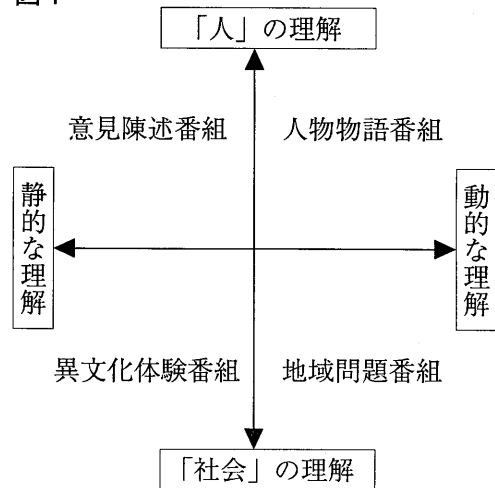
D. 意見陳述番組

この種の番組では、ある人物が取り上げられ、その人物における外国のある地域とのかかわりが放映される。

以下では、この四種の番組における、それぞれの「国際理解」形成の論理を検討する。

(吉川 幸男)

図1



II. 「異文化体験番組」における「国際理解」形成の論理

— 「世界ウルルン滞在記」の場合 —

(1) 番組が伝える知識の構造

ここで取り上げる番組「世界ウルルン滞在記」は、日本のタレントがホームステイをしていく中で、世界各国の生活に触れるスタイルをとり、番組はそのタレントと司会2人、パネラー4人の、クイズを交えたスタジオトークで進行する。今回分析の対象とする回、2000年10月8日放送分は、タンザニアのダドーガ族という砂漠の放牧民族を出合いから別れまで時間的に追っていき、ホームステイという形でともに生活をする中で紹介している。では、この番組は我々にどのような「社会科教育」をしているのであろうか。言い換えると、この番組において我々が獲得する知識とはどのようなものであろうか。

番組において獲得する知識とは、大きく分けて二つある。第一に、番組中のVTRもしくはナレーション、スタジオトークなど視覚、聴覚を通じて直接に獲得することのできる知識である(知識の第一段階)。そして第二に、番組内では直接提示はされることのない、視聴者が先に述べた知識を自分なりに発展、関連づけすることによって得ることのできる知識である(知識の第二段階)。

このように番組を見ることによって獲得することのできる知識を大まかに二つに分けることは、異文化体験番組に限らずほとんどの番組に当てはめることが可能である。しかし異文化体験番組においては、知識の第一段階、すなわちTVで直接に提示される知識が、伝統に代表されるその土地土地に脈々と息づいているもの(静的要素)と、文明に代表されるこれまで根付いていた伝統、生活スタイルに変化、発展を与えているもの(動的要素)しの二つに区分されることができる。

一般に我々が持つ異文化体験番組のイメージとしては、静的要素の紹介がメインで動的要素は扱わないか扱ってもたいした量ではなく、結局のところ異文化体験番組というのは静的要素の羅列的紹介に終止しているという考えがある。静的要素はその土地特有、裏を返せば、ある意味我々日本人とは異質の要素であり、逆に動的要素は、文明と伝統の問題のように現在進行中の動きであるため、かなり我々に通じる要素がある。その場合、普通に考えて静的と動的、我々はどちらに関心を持つだろうか。当然静的要素であろう。なぜならそこには驚きがある。動的要素の中には我々に通じる共感が得られるが、驚きが見つけない。よってインパクトを重視するTV制作者の立場を考えると自然と静的要素の紹介に終始しているのではないかというイメージを持つのは当然である。

しかし、一方でこういう考えもある。静的要素とは、言葉通り時が経とうとあまり変化しない、ある意味普遍的な知識である。つまりインパクトはあってもタイムリーな素材ではない場合がある。よって、新鮮な情報を扱ったり、世の中の動きに即座に対応することができるというTVの特徴から考えると、逆に現在進行中である動的要素こそ重点的に取り扱うべきところであるともいえる。

このようなことを踏まえて実際、静的要素（インパクト、驚き、我々にとって異質な知識）、動的要素（タイムリー、共感、我々と共通な知識）は異文化体験番組内で内容構成上どのように取扱われているのか。また、この番組から得られる知識とはどのようなものであろうか。次の表1は番組の展開過程に即して、番組から得られる知識を区分したものである。表中の〈異〉は我々にとって異質な知識、〈共〉は我々と共通の知識を表す。

表1 「世界ウルルン滞在記」の展開過程と得られる知識

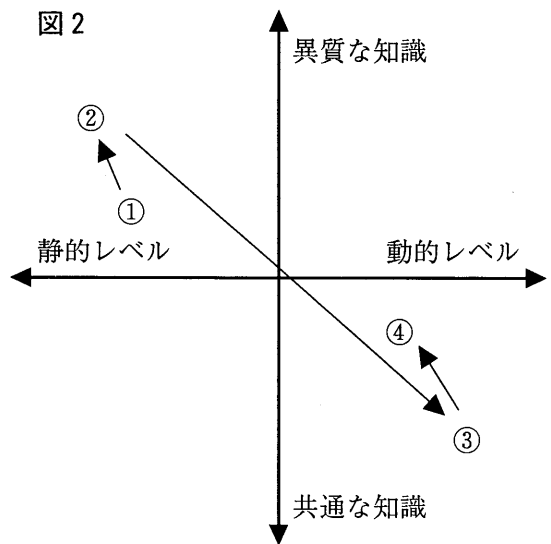
放送内容	知識の第一段階		知識の第二段階
	静的知識	動的知識	
ダドーガ族の紹介（ナレーション） 日本の青年の来村 村長（ホームステイ先）の家族の紹介	〈異〉放牧生活を営む民族である／牛、女子供のためだけに戦う民族／大家族18人で生活／息子3人、妻3人、娘3人 〈共〉挨拶は握手		・勇敢な民族である。 ・ダドーガ族は一夫多妻制をとっている。
①基本的な生活紹介 ダドーガ族の衣食住 ダドーガ族の価値観	〈異〉衣：黒い布を羽織る。古タイヤを使ったぞうりをはいている。／住：猛獣から守るためのフェンスを作る。男は入り口の近くに住む。夫人たちにはそれぞれ家が与えられる。／食：主食はとうもろこしをすりつぶしたもの。食事は朝夕二回／村長、牛100頭、山羊100頭／羊50頭所有 〈共〉服を着る／家に定住している／穀物を食べる／父の命令は絶対服従	〈共〉 タイヤという素材の使用	靴をはくという習慣がない 砂漠の中での生活は、猛獣に襲われる危険と隣り合わせである 放牧が主要産業である
スタジオトーク	〈異〉ダドーガ族はみんな背が高い		
②ダドーガ族の仕事 放牧の仕事体験 水場の発見	〈異〉気温40℃の中で仕事をすする／牛の見張り／人間は水場の水が飲めない／水はすべて家畜へ／家畜の水も一回飲む分だけしか汲まない／家畜は水場に足	〈共〉 おばさんの息子は町	・タンザニアは気温40℃を超える ・家畜を大事にする ・水は貴重である。

放牧が終わり家に帰る 就寝	を入れてはいけない／放牧中人は水を飲んではいけない。8～9時間／家に帰って初めて水が飲める／夜7時には就寝／女は水汲み、乳搾り／自分たちで家を作る／家を作るのは男の仕事／軽々と木材を運ぶダドーガ族／女の子も軽々と／柱をたてて、枝を重ねただけのシンプルな構造	に出ていってしまった	・ダドーガ族は仕事を男と女で完全に分けている ・ダドーガ族は助け合う心をもっている
朝 一日の始まり おばさんの家づくり 木材運び 家の構造	<共>／女性が朝の準備をする／木を使った家に住む／てこの原理の応用		
スタジオトーク 水のありがたさ	<異>水は臭い／ダドーガ族と我々では水を回収する体内組織に差がある／尿が少ないはず		臭い水でも大切にすることで水は貴重。ダドーガ族は体内環境も砂漠の生活に耐えられるようになっていく
ダドーガ族の生活の知恵薬	<異>／山羊はごちそうである／山羊の肝臓は長老しか食べられない／肝臓は薬となる／木の皮は風邪薬になる <共>／薬を飲む／砂漠でも風邪をひく		ダドーガ族は生活の中で薬など様々な生活の知恵を身につけている
クイズ 胃が弱った時に飲むもの 牛のおしっこ	<異>／胃が弱った時、牛のおしっこをのみ、それを吐くことで胃を洗浄する／牛のおしっこで髪を洗う <共>／かゆみ止めとしてのアンモニアの作用		水が貴重なので水で髪を洗わない
③町へ出ていく若者 家の完成 おばさんの話 文明の流入 若者への説教 長老の考え 若者の考え	<異> 町へ出て酒を飲んではいけない 20歳になってもまだ結婚しないことはいけない 牛を育てることが一番である <共> 年長者が若者に対して説教する 嘘をついてはいけない	<共> ・おばさんの息子は町に出ていってしまいい村にいない ・自転車に乗る ・腕時計をつける ・洋服を着る 町へ出たい 商売をしたい 文化への憧れ 文明を止めることはできない	村を出ていくダドーガ族がいる ダドーガ族の中でも文明の流入による価値観の違いが生まれてきている 日本につながることである文明と伝統
④息子の結婚式、別れ クイズ ダドーガ族の嫁入り道具とは おばさんの息子の結婚式 結婚式の後の村	<異>／ダドーガ族は嫁入り道具としてひょうたんをもらう／女は、ミルク、水を管理するためひょうたんが必要／ひょうたんには誰も触らせない／夜11時から朝の5時まで結婚式は続く <共>嫁入り道具をもらう／結婚式をする	<異> 町からまた村に戻ってこようと思っているおばさんの息子 村に残ろうと思う若者	ひょうたんこそダドーガ族の完全な仕事分担をあらわす一例 村の生活の再認識がダドーガ族の若者の中で芽生えている
別れ 長老の言葉	<異>水の大切さを忘れるな <共>うそをつくな／親を大事にしる		ダドーガ族とは我々とは全く異質の民族に見えるが以外にも共通する部分を持っている

(2) 番組内容構成上の特色と手法

この番組は一見、ホームステイという形をとりながらダドーガ族の情報をただ羅列的に

提示しているように思える。しかし表1から明らかなように、静的要素、動的要素、さらに我々にとって異質の知識であるか、また共通の知識であるかに区分して知識の第一段階を分けてみると必ずしもそうではなく、綿密に内容構成されていることが分かる。その表れとして、番組の展開過程において番組前半に静的要素を多く配置し、後半に動的要素を配置している。詳しく見ていくと、この番組は表1に示すように①～④の四つの内容で構成されているが、それらを静的レベル、動的レベルの程度、また我々にとって異質な知識であるのか、また共通な知識であるのかという程度によって、その展開過程を追跡すると図2のように表すことができる。



番組はまず、①～②で静的知識を我々に提示し、その過程で我々にとって異質と思われるレベルも高まり、水の大切さに結びつく生活の知恵（水を一日一回しか飲まない、おしっこで髪を洗うなど）を扱う②でピークに達している。

動的な内容が出てくるのは番組中盤以降③からである。ここで我々にも関わってくる、文明か伝統かの選択という大きな問題を投げかける。まとめとなる④は、結婚式という一見静的レベルの強い内容を扱う中に、町から村へ帰ろうと考え出す若者の動きも織りまぜており、③であげた問題をこの番組なりにまとめている。

なぜ、このように構成されているのか。それは先述のようにダドーガ族にとっての静的要素とは日本の視聴者には異質なものが多い。つまり、静的要素からはインパクト（驚き）を我々は受けるのである（例：牛の尿で髪を洗うなど）。そして我々は番組に引き付けられる。しかしインパクト中心になると、ダドーガ族のおもしろおかしいところを一面的に見るだけの単なるバラエティ番組となったり新鮮な情報を扱うというTV番組の特質を忘れたタイムリーな素材のない番組になってしまう。同様に、静的要素のみを番組で伝えたならば、ダドーガ族は我々とは違う異質な民族というイメージしか頭に残らないかもしれない。これでは真の国際理解とはならないことは明らかである。そこで動的要素もこの番組内で取扱っているのであるが、それらを後半に入れている点にも構成上のねらいがみられる。動的要素には、ダドーガ族の町に出ていく若者に代表されるように我々に通じているところがある。つまり動的要素が出てくると我々は、共感したり、考えさせられたりするのである。そのような動的要素が、番組前半から出てきたらどうだろう。視聴者は堅苦しい番組であると敬遠しチャンネルをかえる可能性がある。よって静的要素の紹介で視聴者を十分に引き付けた後に動的要素を取り上げているのであろう。

（3）番組視聴によって得られる国際理解の特色と問題点

以上考察したように、この番組は少なくとも知識の第一段階に関しては、静的要素の羅列的介绍に終始せず、綿密な内容構成のもと動的要素も織りまぜた異文化体験番組であることが明らかになった。言い換えるとこの番組は、静と動の両方の要素を我々に提示することで、一面的ではない国際理解形成の役割を充分にはたしているように思われる。

さらに知識の第一段階に関する限り、TV番組による「社会科教育」には「学校社会科教育」を超える特色がみられる。映像で送られてくるTVの情報は、製作者の意図する以上のものを我々に与えてくれる。TV映像で放映する対象物には常に背景が映されるが、その背景全て何からの知識になりうる可能性がある。例えばダドーガ族が食事をする映像から、我々は「食器はなにを使っているのだろうか」、「箸みたいなものは使うのか」などの発見が番組を見ることで可能となる。このように知識の第一段階における多様性の幅が広いのはTV番組の特色であろう。

しかし一方、TV番組としての特性上、その「社会科教育」としての機能に当然限界がある。上記の考察はすべて知識の第一段階に関するものであった。その一方で知識の第二段階に関しては全て「視聴者まかせである」という点に特色づけられる。

表1において筆者は、知識の第二段階として、第一段階の知識を発展、関連づけて獲得するであろう知識を予想して記述した。しかし、結局この予想も、筆者個人の考えでしかなく、何万という視聴者の中には、全く別の視点で捉える人もいよう。つまり、TV番組はその性質上一方的に情報の伝達（ここでは知識の伝達）をするだけで、関連づけ、解釈等は全て視聴者まかせなのである。TV番組から情報を受け取ることが目的であれば、知識の第二段階への発展は視聴者まかせでもよいのであるが、「社会科教育」の役割をTV番組に求めるのであれば、その点は大きな問題として残る。

その点、「学校社会科教育」においては、取り扱うことのできる情報がTVに比べ圧倒的に少ない反面、知識をさらに発展させることができる。ダドーガ族が水を大事にするという例で考えれば、TV番組の場合、「水は一日一回しか飲まない」「水の代わりに尿で髪を洗う」「家畜が水場に足を入れることを許さない」など、知識の第一段階に関しては情報が多く具体的でわかりやすい反面、知識の第二段階に関しては「水が大事だ」という一般化ができる程度である。これに対して「学校社会科教育」の場合、「一年でほとんど雨が降らない」という少ない記述情報から「どのくらい降らないのか？（降水量を比較）」→「なぜ雨が降らないのか？（気候区分を調べる）」→「水が大事」→「ダドーガ族に限らず、この気候区分に入る地域では水を大事にする」など、知識が何段階もの構造化を築いてゆく。TV番組においては、知識の第一段階と呼べる情報が生活レベルの知識であり、具体的で分かりやすい。しかしその多くの情報を発展させることは不可能であり、知識の発展を望むのは困難である。「学校社会科教育」においては扱う情報が少なく、具体性に乏しい反面、知識の発展という点において固有の存在理由をもっているといえよう。

（藤本 大介）

Ⅲ. 「地域問題番組」における「国際理解」形成の論理

－BS特集「アジアから主食が消えていく－変わる稲作地帯からの報告－」の場合－

（1）番組の内容構造と展開

ここで取り上げる番組は、アジア4カ国（インドネシア・中国・バングラデシュ・フィリピン）の稲作を取り巻く環境に変化が生じている地域に焦点を当て、映像と解説により、90分で構成される。番組の展開過程はおおよそ表2のようになっている。

表2. BS特集「アジアから主食が消えていく—変わる稲作地帯からの報告—」の番組概要

	主な映像	音声により解説された事項
導入	アジア各地の稲作の様子 米の生産量のデータ	(アジアの米生産の現状) ・インドネシアでは稲作からえび養殖へ転換した農家がある。 ・中国では稲作から畠作へ転換した農家がある。 ・バングラデシュでは農村から都市へ人口流出 ・フィリピンでは棚田が共同体の生活を支える。
展開1	えび養殖池 えび養殖を営む農家 米市場 東南アジアで自然災害が起こった場合のシミュレーション	(インドネシアの稲作地帯の現状) ・近年水田がつぶされえび養殖池が増加している。 ・えび養殖の方が稲作よりももうかる。 ・主食の米は以前は政府が一定の価格で買い上げていたが、今は仲買人が国産米・輸入米関わらず市場で売買。 ・経済力のない国は飢餓状態になる。
展開2	市場 稲作から畠作に転換した農家 アジアで急激な人口増加が起こった場合のシミュレーション	(中国の稲作の現状) ・中国は財政負担を理由に米の買い上げ量を減らす。 ・水田から野菜畑へ転換する農家が増加。 ・野菜の方が米よりももうかる。 ・畠作農家の祖父は米は再生産すべき。 ・アジア全域で2035、中国では2005年に主食の米が賄えなくなる。
展開3	首都ダッカの様子 農村地帯のダンカイルの様子 イリ米作りを行う百姓 市場 イリ米を止めて伝統的な農法に農法に替えた村(百姓)	(バングラデシュの稲作の現状) ・稲作を止めて農村から都市へ流出。 ・緑の革命で普及したイリ米は、短期間で栽培でき収量も多かったが収量は年々減りつづけ、肥料代などかさみ問題も生じている。 ・イリ米を作る以前は再生産していた野菜を購入。 ・伝統的な農法に替えることで裏作などができるようになり、イリ米をしているときよりも生活が豊かになった。
終結	棚田の風景 市場 棚田で稲作を行う村(百姓)	(フィリピンの稲作の現状) ・台風の被害を受けなかった。 ・地元で収穫したものを近隣の人々が集まって、商売している。 ・共同体のつながりが強く残っている。

このように、番組では、インドネシア・中国は稲作からえびや商品作物へ、バングラデシュでは緑の革命で導入当初は高収益をもたらしていた「イリ米」が、現在では肥料代や設備投資などで重い負担になっているというように、稲作を取り巻く環境の「動的」な(変化を遂げている)事例が主に紹介されている。番組後半の展開2の一部分と展開3で「自分たち家族の食べる米は再生産すべき」と主張する家族の祖父の発言、「イリ米」による農業をやめて従来の伝統的な農法に替えて成功した農村(百姓)や、さらに終結では共同体の結びつきが強く残る「棚田」で農業を営む農村(百姓)の紹介をしている。この三つのうち、前二者は昔(前近代)のありかたや農法に帰ろうとする事例、後半は昔から変わらない事例である。前二者が「動的」な事例であるのに対し、後一者は「静的」な事例である。つまりこの番組は、アジアの稲作を取り巻く環境を「動的」なもの(変化を遂げた事例)と「静的」なもの(変わらない事例)の2要素で全体を構成しているとみられる。

この番組は、①映像、②スタジオ、③シミュレーションという三つの場面をつなぎ合わせることによって構成されている。①の映像とは、4カ国における稲作の現状についてのVTRである。具体的には耕地の現状、それに留まらず市場の様子や、近年各国の政府が稲作に対してどのように認識し、どのような政策をとっているのかを紹介する。さらに、具体的に実際に農業を営む農村(人物)を取り上げ、現地に取材にいった者と現地の住民

の問答が放送される。②のスタジオとは、主に番組の司会・進行役のNHKのアナウンサーと、農村社会学が専門の大学教授が登場し、VTRを見ての感想、主にはアナウンサーと大学教授の問答・対話で構成されている。③のシュミレーションとは、今後起こりうるであろう事柄を、出演者とは別の専門家が表やグラフを作成して視聴者に提示するものである。この番組は大まかにいえば、①映像、②スタジオ（アナウンサーと大学教授の問答）、③シュミレーション・データの紹介、を繰り返すという構造から構成されている（図3）。

この番組の手法で注目されるのが、スタジオでのアナウンサーと大学教授の役割である。①の映像の後と③のシュミレーションの後には必ずこの2人が登場し感想・意見を述べたり、問答がある。ここでの期待される効果としては、番組内容の展開ごとのまとめや、シュミレーションの結果をどう考えたらよいか、それを視聴者に具体的に分かりやすくするものであろう。また場面の展開ごとに彼等の発言がなければ、ただ単に映像とナレーションを放送しているだけで番組の内容の理解は視聴者まかせのものになってしまう、番組制作者の意図は伝わりにくいものになると予想される。このような問題に対処するために、アナウンサーと大学教授の役割がこの番組では重要な位置を占めていると考えられる。

また、シュミレーションの役割も注目される。展開1では東南アジアで自然災害が起こった場合、展開2ではアジアで急激な人口増加が起こった場合に、それぞれどのような状況に陥るのかを予測している。この2つのシュミレーションは、具体的な表・図を効果的に用いることにより、主食の米に対する危機感を具体的に示す効果をもたらしている。

（2）番組内容から獲得される知識の重層構造

それでは以上のような構造をもち、また番組制作者の意図を明確に視聴者に伝えるための手法がとられている当番組から視聴者はどのように知識を獲得するのであろうか。

表2では、番組の内容展開の過程を、導入・展開1・展開2・展開3・終結の5パートに区分した。このそれぞれの放映内容は、映像・音声から得られる知識を抽出すれば、大きく三つのレベルに区分することができる。

まずレベル1は、主に映像・音声から直接に得られる知識である。この番組を構成していく上で重要であろうと思われる動的な場面や、現地で生活している百姓の発言を再構成することにより、番組から抽出することができる。次にレベル2は、アナウンサーと大学教授の発言のまとめから得られる知識である。主には大学教授の展開ごとの映像・音声を聞いたあとの感想や評価から抽出できる。さらにレベル3は、レベル1・レベル2を通して、展開ごとに考えられたり、想起されるであろう知識である。番組の5パートの内容を各レベルの知識に分けて示すと、表3のように整理できる。なお、表中に登場するマツムクリ、スタル、石、タンガイル、プノは、いずれも人名である。

図3

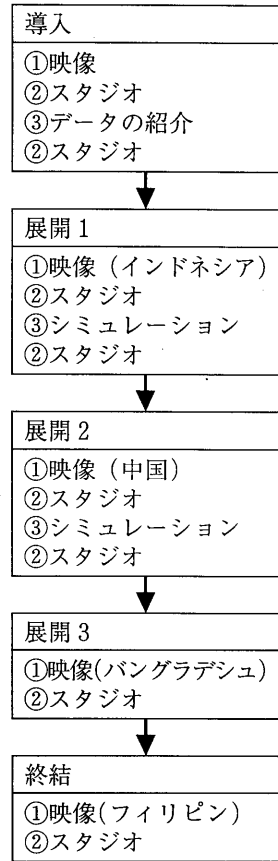


表3 「アジアから主食がきえていく—変わる稲作地帯からの報告—」から獲得される知識

	レベル1	レベル2	レベル3
導入	<p>●米の生産国の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インドネシア 米の自給国から世界最大の輸入国。水田→えび ・中国 世界最大の米生産国 稲作→畠作 ・バングラデシュ 緑の革命で米の増産 農村から都市への人の流出 ・フィリピン 棚田：世界遺産、2000年に渡り作りが営まれる。共同体の生活を守る。 <p><米の生産量のデータ> 米生産しているのはほとんどがアジア/自給用は9割以上/国際取引の量は10年で2倍。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアの主食「米」が大きく揺らぐ。 ・米は自給が基本、アジアの主食。 ・(アジアの主食の米に)大きな影響を及ぼしている。 ・農産物の輸入障壁をなくそうという流れ。 ・日本でも95年に米輸入 ・インドネシアは98年。 ・国内流通も自由化。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアの主食「米」を取り巻く環境の変化。 稲作から商品作物栽培へ <p>アジア全体で輸入自由化の波</p>
展開1	<p>●インドネシアの稲作の現状</p> <p>この10年水田がつぶされ、えび養殖場に/田を買い取り養殖場に変えていったのは日本の資金や援助を受けた企業/田を売った農家は養殖場で働く/農家が自力で田を養殖場に転換し、企業に買ってもらう/企業側もこうした動きを歓迎/インドネシアは日本向けの最大の輸出国</p> <p><農家の紹介・レンコン村のマックムリ> えびは米の五倍くらい収入がある/農業はつづけている/三年前から国が安定した価格で買い上げてくれない/米による収入は三年前の六割に落ち込む/三年前の農業の片手間に副次収入を得るためにえび養殖/今では、えびが主</p> <p><インドネシアの状況> 84年に米の自給を達成/国の政策が工業重視に転換/農業だけでは生計を立てられない人が工場労働者になる/主食である米は政府は一定の価格で買い上げていた/インドネシアは三年前に財政破綻。</p> <p><インドネシア役人> 米を買い取るのは財政負担/今後は民間に任せるべき</p> <p><米市場> 業者は米の輸入自由化以降、安い方を選択</p> <p><マックムリ> えびの飼育には米作りより、はるかに多くの費用がかかる/近年えび養殖は不振</p> <p><マックムリと同じ村に住むスタル> 農業に変わる収入を得るためバイクタクシーの仕事をしている/養殖場ができたために、用水路の流れが悪くなったため稲作できない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシアはなぜ、2つの自由化に取組むのか ・農村にどのような影響を及ぼしたのか。 ・米の2つの自由化は、人々の生活に大きな変化をもたらす。(大学教授) ・主食の揺らぎは地域社会や家族・暮らし全体に危機を及ぼす。(今年東南アジアで自然災害おこった場合、米の生産量にどのような影響がでるのかというシュミレーション) ・500万t(5千万人分)。 ・価格40%上昇。 ・経済力のない国は飢餓状態。(大学教授) ・1993年の日本の凶作。緊急輸入をした。 ・日本が多く買い上げたため、貧しい国が買えなくなった。 ・農村は飢餓に強いわけではなく、農産物が商品化するとお金を持っている地域が買い集める。 ・農村が飢える 	<ul style="list-style-type: none"> ・稲作は農家にとって儲けにならない。 ・しかし、稲作を全くやらず、自給もままならなくなると経済力のない国は危機的状況におちいる
展開2	<p>●中国の稲作の現状</p> <p>市場には地元の米より他の地域・国の米が多い/中国政府は財政負担を理由に買い上げ米を減らす。</p> <p><中国の学者> 国際市場で安い米を買えばいい/国産米と輸入米をバランスよく組み合わせればよい/水田から野菜農場/農家は土地を貸し地代を得る/地代と出稼ぎで生計を立てる</p> <p><農家の石> 田を全て畠に変え収入は3倍/米作のときは、豊作でもお金にならない/自分の食事の為の米は購入</p> <p><石の父> 自分で食べる米は自分で作るべき</p> <p><石> 米は買えばいい</p>	<p>(大学教授)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農家が揺らいでいる。 ・野菜はいいときはいいが、暴落もあり不安定 ・稲作は安定作物。 ・農家にとっては野菜は不安定な要素。(アジアの急激な人工増加おこった場合どんなことがおこるのかのシュミレーション) アジアは2035年に主食をまかなえなくなる。中国は2005年。(大学教授) ・中国を養える国はない。 ・中国の動向が今後の課題。 	<ul style="list-style-type: none"> ・商品作物の発展により、稲作並びに主食の「米」は危機的状況(不安定)になる。

<p>展開 3</p>	<p>●バングラデシュの稲作の現状 農村から都市へ人が流出／首都の人口は急激に増える／都市で働く人々は米では生計が立てられない／農村地帯のタンガイル バングラデシュは緑の革命を推進し米の自給率向上を目指した／イリ米は、高い収量をもたらしたが、高い肥料代を強いられるようになる／イリ米は乾季に作付けするため、この時期の他の作物が作れない／イリ米を作っているブンノ イリ米は最初の年は収量が多かった／年々へりつづける／周りの農民とつくってるからやめられない／急な金が必要になると米を売る／そのお金で野菜などを買う。以前は分けてもらった／肥料も購入／バングラデシュの3割が土地を持たない「ブミヒン」で、農業の手伝いで生計を立てる／イリ米作りが始まって彼らの仕事が減ってきている／土地持ちの農家がブミヒンを養うのは伝統的な村の姿／イリ米の普及は共同体を崩壊させ、都市に人を流出させた／ヒンガノゴル村 イリ米をやめ、伝統的な農法に帰る／雨季は稲作。乾季は野菜／伝統的な農法に帰るものが多くなる</p>	<p>・バングラデシュは緑の革命で農業技術の革新によって主食を増産して乗りきろうとした。 ・「イリ米」（短期間で栽培。収量が多い。） ・バングラデシュも奨励 ・緑の革命の失敗は、米は工業製品ではない。 ・農地は米だけではなく、トータルの食料を作っていた。 ・従来の村社会が崩壊。 ・農村から都市へ流出。 ・21世紀は都市も飢えていく。 ・従来の農法に戻ろうとする動きは、暮らしが安定することが分かった。</p>	<p>・緑の革命（イリ米）により、共同体は崩壊の危機に陥る。 ・従来の農法に帰ろうとし、このことは農業生産のみならず、共同体の復活の可能性もある。</p>
<p>終結</p>	<p>●フィリピンの稲作の現状 森林伐採も進み去年の10月に台風直撃し、被害を受ける／世界遺産の棚田は台風の被害を受けてない／2000年の伝統を持つ／棚田の上の木はむやみに切つてはいけない／市場では近隣のものが集まる／バギンゲ村 村人はほとんど稲作農家／過疎の問題がない／葬式では村のほとんどの者がやってくる／共同体のつながりが強く残る／若者の姿が目立つ／村の人口も増える／食事は近所の人に分けてもらったり、自分で作った物／田に神がいると信じている／収穫の際は祈捧をする／田植えや収穫は皆で助け合う／助け合いの仕組みをアップという／脱穀機は共同購入・利用。</p>	<p>近代化と共同体が上手く融合している。／工業と農業、近代と前近代の2項対立的に持っている。棚田の住民はなんとか1つにしと努力している。／ヨーロッパは自給率を戻している。農業の安定性の上に工業・商業がある。／日本は先進国とはいえない。／日本は戦後、農業国から工業国に変換。／農村が小さくなった、家族・ふるさとの小さくなった。／日本は飽食で危機に気づかない。「危機に気づかない危機」</p>	<p>・稲作地帯にとつては、フィリピンの棚田の村が理想 ・農業基盤を見なおす</p>

レベル1の知識は、番組内容、また番組放送時間の大部分を占めている展開ごとの各国の映像と、それに伴う音声声を再構成したものから直接得られるものであり、展開ごとにごこの番組を見て視聴者が最初に獲得するであろう知識である。いわば視聴者がこの番組から得る「第一次的な知識」である。レベル2の知識は、レベル1での映像とそれに伴う音声から出演者がそれをどう考えるのかを再構成したものである。レベル1が映像から視聴者が直接獲得する知識であるのに対し、レベル2は出演者が考えて発言し視聴者が獲得する知識であり、「出演者」というフィルターを通して視聴者に提供される「第二次的な知識」である。レベル3の知識は、映像と音声、さらにシュミレーションと出演者の発言から視聴者に形成されるであろう知識である。レベル1が映像から直接得た「第一次的な知識」、レベル2が出演者を媒介した「第二次的な知識」とすれば、レベル3はこの両者を融合した「最終的な知識」と呼べるものであろう。この番組の展開は「第一次的な知識」から出演者を媒介としてそれを「第二次的な知識」として獲得し、両者を融合した「最終的な知識」として形成されるように構成されていると考えられる。

(3) 番組視聴によって得られる国際理解の特色と問題点

国際理解との関連でこの番組の優れている点は、ただ海外の事例を視聴者に紹介するに留まらず、動的な事例と静的な事例を効果的に紹介していることである。さらにこうした

事例を羅列するのではなく、展開2の後半（畠作を営む家族の祖父は自分で食べる米ぐらいは作るべき）、展開3の後半（昔からの農法に帰る農村）、終結（共同体の結びつきが強く残る「棚田」）の番組後半に静的な事例が集約されている。すなわちこの番組には、工業化や都市化が進むなかでも静的な部分、共同体の結びつきは大切にすべきだというメッセージがこめられているように思われる。こうした問題は単に海外の事例だけではなく、現在の日本社会でも指摘される、地域や共同体の結びつきの希薄化の問題ともリンクさせて視聴者に受け止められる。つまりこの番組は海外の稲作地帯のありかたを紹介するばかりでなく、現在の日本の農村部のあり方、さらには日本社会全体のありかたについても再検討できる番組であるように思われる。

しかし、この番組を視聴することをもって「社会科教育」として完結するかとなると、問題点もある。確かに「学校社会科教育」に比べると、教科書を通して学ぶよりも具体的な事例が多く、動的な要素が多く紹介されているため、問題事態の中に入り込みやすく、アジアの農村の立場から考えるような視点の移行が容易である。この番組は視覚に訴えるもの、映像さらには音声を中心に構成されているため、その点での効果は大きい。その反面、数少ない写真や教科書記述から社会の事象を想像するという活動が、TV番組にはない。TV番組は想像するという過程が全くなく、問題事態をダイレクトに訴えかける。番組の映像から何を考え、他の立場から何を想像するかという、「社会科教育」で重要な社会的想像力をいかに保持し、発展させるかという問題が残る。（松田 朋範）

IV. 「人物物語番組」における「国際理解」形成の論理

－「新アジア発見 ーヒロシマを伝える少女たち」の場合－

（1）番組の概要

ここで取り上げる番組「新アジア発見」（2000年11月19日放送分）では、広島原爆資料館などで戦争の悲惨さを感じとってきたインドの少女たちの行動と、それに対する周りの反応を中心に番組が展開する。お互い敵国視するインドとパキスタンの間で核兵器廃絶を訴える少女たちを主人公として、彼女たちの苦悩と努力を物語風に描く。核兵器廃絶を求める声と核兵器の必要性を訴える声との相反する意見のなか、自分でみて考えたことの正当性を少数派ながら主張する少女たちがいる。このことを通して、インド（パキスタン）の現実を知り、核兵器保有について、さまざまな意見の見解があることを伝えている。

番組は、バスダ・レディー、ムリナリニ・ガディオークという二人の少女の語り、それを支える者の語り、反対する者（無関心）の意見、ナレーションなどによって構成されている。展開過程は、この二人の少女を主人公にした物語として構成され、この物語には核兵器廃絶を訴える少女たちのほか、反対派・無関心な人たち、少女たちを支えている人たちといった登場人物とのかかわりのなかで、少女たちの最初の具体的な気づきから、少女たちの方針・方向の変化や決定の過程が取り上げられ、核兵器廃絶という問題から繰り広げられる少女たちの行動や考え、感情の変化を綴っている。物語は「状況・問題→意図（考え）→行為→帰結・結果」というサイクルを三回繰り返すようにして構成され、一回目、二回目、三回目からなる計三段階の展開過程を形づくっている。具体的には、以下の表4のように表すことができる。

表4 「新アジア発見 ―ヒロシマを伝える少女たち」の物語構造

第一段階

状況・問題	意図・(考え)	行為	帰結・結果
<ul style="list-style-type: none"> 核兵器の恐ろしさを伝えようとする少女たちを追う 広島への平和団体の招きで、インド、パキスタンから広島を訪れる インドはパキスタンと紛争 核兵器は国を守るために必要 大国が核兵器を持つので、インドが持つのは当然 両国は核兵器を持ったまま睨み合っている インドが核兵器を持つのは大国と渡り合うため 	<p>(バスダ・レディー)</p> <p>インド人は、広島や長崎のことを知らない</p> <p>(バスダ)</p> <p>クラスの人に伝えるが、伝わらない/人間という観点から考えるべきだ</p> <p>(クラスの人)</p> <p>パキスタンとは仲良くできない</p> <p>(バスダ)</p> <p>広島に行く前、核兵器は必要</p> <p>→父親の影響</p> <p>(バスダの父)</p> <p>核兵器というものを知るためにも、広島へ行くことを勧める</p> <p>(バスダ)</p> <p>核兵器を持つことに対して反対の意見に変わる</p>	<ul style="list-style-type: none"> 集会の練習 (ムリナリニ・ガディオークの祖父) 放射線に苦しむ様子を語る (ムリナリニ) 信念を持つ強い人間になる決意 核兵器をなくすため、できる限りのことをしようとする 集会の様子 收拾がつかないまま初めての集会が終わる (バスダ) (ムリナリニ) 広島で見聞きしたことを通して、戦争の悲惨さを語る/核を持っている国は他にもある パキスタンの悪口/パキスタンにも平和を願う人がいる/核兵器の恐ろしさを知ってほしい (バスダと父親) 話し合う (バスダ) 集会のスピーチの内容を父親に伝える (バスダの父親) 自分の信じることをやるよう勧める/自分の意志をもち、表現できる人間になってほしい 	<p>最初は自分たちが見聞きしたことを必死に伝えれば、みんな理解してくれると思っていた。しかし、そんなに単純ではないことを思い知らされる。</p>

第二段階

状況・問題	意図・(考え)	行為	帰結・結果
<ul style="list-style-type: none"> パキスタンの若者たちの状況・心情を紹介 インドとパキスタンの間に友情が芽生える 核兵器廃絶へ ムリナリニとオマールのメールのやりとり 	<p>(ムリナリニ)</p> <p>(オマール・パーベツ)</p> <p>お互いうまくいかない</p> <p>(ムリナリニ)</p> <p>お互い励まし合いながら信じる道を行こうとする</p>	<ul style="list-style-type: none"> 町に出て訴えかける 人々の数が増えたのを見計らって、スピーチをはじめ 無関心 	<p>いろいろな支えもあり、あきらめずに自分たちにできる行動を起こす。しかしやはり、それだけでは周りは自分たちの訴えに冷たく無関心であり変化を示してはくれない。</p>

第三段階

状況・問題	意図・(考え)	行為	帰結・結果
<ul style="list-style-type: none"> 集まった人たちは関心を示さない 関心がないのは反発されるより辛い 	<p>(ムリナリニ)</p> <p>あきらめかける</p> <p>(ムリナリニ)</p> <p>広島へ招待を呼びかけてくれた人に電話をする</p> <p>(広島へ招待を呼びかけてくれた人)</p> <p>人へ伝えることの難しさを教える</p> <p>→一人ずつ一人ずつ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ムリナリニが身近な人から一人ずつ自分の言葉で伝えていく (ムリナリニ) 行動してくれる人を探す いっしょに説得していきたい あきらめない 恐怖を感じる前に、自分たちに何ができるのかを考えていきたい 核兵器のない世界に… 	<p>少女たちは試行錯誤を繰り返し、価値観を共有できる人たちを説得し探し始める。最初は小さな一歩かもしれないが、今、自分たちがすべきことを見出した。</p>

(2) 番組視聴によって得られる国際理解の特色と問題点

この物語を視聴した視聴者は、どのような「国際理解」を形成するであろうか。

核兵器廃絶の運動は、日本ではかなり国際的に普遍的な運動のようにとらえられている。

それだけに、バスダとムリナリニの運動は日本の視聴者にとっては共通な要素の多い、理解されやすい運動である。ところが、運動をとりまく環境は日本とは大きく異なり、インドにおける理解者は極めて少ない。視聴者は人物の行為に共通な要素を見出しながらも、かれらを取り巻く環境に非常に異質な要素を見出すことになる。こうした「人の行為の共通性と社会環境の異質性」で物語を構成することがこの番組の基本的な方略になっており、視聴者はこれによって「人が考えることは同じだが取り巻く環境は国によって違う」という「国際理解」を形成することになる。

しかし、個人の物語として構成される番組では「違うのだ」という理解で終わらせるわけにはいかない。その違いをいかに埋めるかをめぐって努力する主人公の行為が追究され、結局は身近なところから一人ずつという、廃絶運動への地味な一つの方法に立ち至る。ここで視聴者は、国によって社会環境は大きく違うが結局は人々の地味な活動が社会環境を動かし、違いを乗り越えてゆく方向に社会を発展させるのだというメッセージを読みとることになる。視聴者はこれによって「国の違いを動かすもの」という動的要素を含めた「国際理解」を形成することになる。

さらに、形成された「国際理解」をもとに、視聴者が番組から考える内容として三つの内容領域へと関心が拡大してゆく。

第一は、「核兵器廃絶運動の今後」である。現時点で核兵器廃絶運動は決して世界的に普遍的な運動ではない。そんな状況の中で、核保有問題をどう受けとめ、どう行動していくか、運動のあり方として変えていかなければならないものは何か、などといったことに関して、今後の日本の方向を探る、という領域である。

第二は、「インド」あるいは「アジア」という地域をどう理解すればよいか、という問題である。欧米中心の視点から見た場合の核兵器廃絶の意味と、アジアから見た場合の核兵器廃絶の意味は大きく異なるのではないか。アジアにとって核兵器廃絶とはどのような意味をもつのか、という領域である。

第三は、バスダとムリナリニ個人はどう成長したか、という問題である。かれらは正しいと思った自分の考えを主張し、議論することと同時に、「自分でわかる」だけでなく、「相手にわからせる」難しさを知ってゆく。これを見て、このような悩みをもつ人は自分だけでないことに気づき、相談することの必要性を読みとる視聴者も多いであろう。こうした、社会を生きてゆく人生の処方的な関心事の領域がある。

この番組は、最終的には見る人々の属する国、おかれた社会環境によって解釈や焦点、視点が異なってくる。核保有の現状、インドやパキスタンの状況、そういった中での少女たちの行動など、共通する知識を得た後は各個人の判断・解釈に委ねられる。番組の行う「社会科教育」としては、国による環境の違いや、その違いを動かす動因を視聴者に形成するところまでは共通であるが、その後の関心事、認識発展については視聴者にゆだねられているとみることができる。

(藤永 佳宏)

V. 「意見陳述番組」における「国際理解」形成の論理

—ETV 2 0 0 0 「日本人の肖像」の場合—

(1) 番組の概要

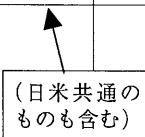
ここで取り上げる番組は「ETV 2 0 0 0 日本人の肖像」のうち、2000年11月14日放送分「第二回 敗北を抱きしめて」である。この番組では、アメリカのピューリッツァー

賞を受賞したジョン・ダワー氏の著書『敗北を抱きしめて』の紹介を行なっている。日本の戦後を、ステレオタイプに見ることなく、歴史家の視点を加えて考察し、日本とアメリカ、東洋と西洋等の一見違うものの共通点を探ることで、将来の地球人としてのあり方を考えることを呼びかけている。主にダワー氏自身の語る場面が多く、内容的には①日本人のアイデンティティーとは何か、②日米・2国間による揉み消し政策、③ステレオ・タイプの説明とその危険性、の三点を伝えようとしていると考えられる。

ダワー氏の研究方法は、それまで行なわれてこなかった戦後の庶民の文化や歴史資料を詳細に日本人の立場に立って見ることを行い、できるだけ多くの階層の人に触れている点が評価されている。番組では、映像・資料・ナレーションとダワー氏の話を繰り返し、ダワー氏の訴えていることを理解しやすいように工夫されている。また、この著作の評価も、受賞という形だけでなく、アメリカの中学校・高等学校の教師が受け容れ、教材として子どもたちとともに学び始めたことも紹介されている。

番組に見られる「国際理解」の枠組みとしては「世界共通のもの」を述べ、「世界共通とはいえないもの（日米共通のものを含む）」を指摘し、「日本独特のもの」を明らかにするという内容構成がとられている。番組展開に沿って、それぞれの内容を辿ってゆくと表5のようにあらわすことができる。

表5 「ETV2000 日本人の肖像」の展開過程と提示される知識

番組の映像	世界共通のもの	世界共通とはいえないもの	日本独特のもの
ダワー氏 ピューリッツァー賞授賞式 敗戦の写真 紙芝居	「日本の将来に向けての一番優れた考えと敗戦の経験から人々が築き上げてきた平和と民主主義にあるはずです。」 日本人のことを知りたければ、権力者から普通の庶民まで、若者から子どもも男性、女性、全ての階層の人等できるだけ沢山の人の声を聞くこと。ドイツ人、フランス人、イギリス人でも同じことである。	 (日米共通のものを含む)	
「新女性手紙文集」「黎明」「青年」「青年時代」「ギンノスズ」手紙・投書・新聞・風刺・日記／戦後の写真 フライパン／なべ／お菓子／靴の販売の様子	当時の日本は、敗戦をあらゆるものの再出発とした。死の恐怖から解放され窓から黒い布をはずし、空襲の心配なく家庭での日常を取り戻し、個人の生活・音楽・読み・書くことが自由になった。		
ダワー氏 ダワー夫妻 「人種偏見」の本	300万人の命が失われたことへの後悔。平和で自由な社会をめざして日本は努力した。あの時世界中の全ての人々が戦争、平和、自由、正義、民主主義、良い社会、個人の生活、市民社会について考えた。 日本人をちっぽけな黄色い猿と呼び、日本はアメリカを鬼畜米兵と呼び、鬼畜生と呼んだ。 ステレオタイプ・・・自分と人をどう認識し言い表すのか。どんな国にも存在する。人種に対するステレオタイプ・文化へのステレオタイプ・女性への、男性へのステレオタイプ	日本の戦争責任にたいして、日本が特に無頓着だというわけではない。	

	⇒共通点を見つけるべき しかし成熟した国家なら事実を直視し、公にし、できるだけ明らかにし、なにが起きたかを明らかにする勇気をもつことが、国を愛することである。もっとよい国になってほしいのなら、誇りを持って間違った行為をあきらかにするべき。	アメリカにおけるベトナム戦争、ヒロシマの総括は不十分	
敗戦の映像 街の風景 日本の都市の映像 アメリカの書店	官僚制は、アメリカにもソ連にも共通して存在する。(歴史のある時では多くの国に存在した可能性がある。)	日本+東洋+西洋をミックスした非常に洗練され	天皇の戦争責任 軍の中枢人物のみ東京裁判を受ける。天皇制について話す事はタブーとされている。1950年の朝鮮戦争を契機に日本を再武装させようと言出し、日本の戦争責任を忘れさせようとした。1970年の経済成長期のエコノミーウォーなど。2国間による、もみ消し政策

(2) 番組視聴によって得られる国際理解の特色と問題点

番組の流れ全体をみると、番組の前半では、日本に見られる事象の中で、一見日本特有であるように見られているものが実はそうではなく、世界共通の事象であることが多いということを述べている。アメリカのジャーナリストが必ず用いる、「でる杭は打たれる＝和の精神」この言葉は日本の集団行動をよく言い表していると言われる。しかし、アメリカにも同様の言葉はある。「首を突き出すな」(他人より低い姿勢でいるということ)、「ボートを揺らすな」(ボートに乗ったら、立ち上がるなじっとしているということ)ということわざである。このように番組前半では、ダワー氏の見方は、日本に対する客観的な見方から、アメリカに対する客観的な見方につながってゆく。

番組後半になるにつれて、日本独特のものは、むしろ作為的に作られた日米独特のものであるという整理の仕方をしている。ダワー氏の見方は最終的には、西洋と東洋の馴れ合いのオリエンタリズムというステレオタイプの見方の形成過程へと続いてゆく。

これまで日本独特なものは何かというと、現象としては、「天皇の戦争責任」とか「東京裁判」とか「ステレオタイプにアメリカ兵を鬼畜米英と呼ぶ」など、いくつか挙げられてきたが、これも2国間のもみ消し政策であるとか、どの国にでも現れる現象である、と述べている。したがって日本独特のものとは、日本の指導者や権力者が生み出す文化やシステムではなく、日本の庶民の産み出す日本の文化であるということになる。すなわち「神の国」「儒教」「和の精神」などではなく、日本+東洋+西洋のミックスされた非常に洗練された文化ということになる。

氏は「百年前のアメリカ人と、今のアメリカ人は違うし、私と子どもたちも変化するのは、あたりまえである」と述べ、「共通なもの」と「独特なもの」を絶えず「動き」の中で見出す方法をとっていると思われる。すなわちその時代に大半の人がとっている行動に「静的な要素」、一部の者がとり始めたが、今やとどめようのない流れを持つものに「動的な要素」をおき、「静的な側面」から「動的な側面」への動きの中に「共通するもの」を見出し、その動きの仕方が国によって違ってくことに「独特なもの」を見出している。

この番組を視聴することによって得られる「国際理解」は、このようなきわめて方法的側面に傾斜したものである。世界の事象に対し「共通」とか「独特」などというとらえ方

をするときは、動きの中で形成的に物事をみる「歴史的な目」が必要だという着眼点を、この番組は視聴者に与えている。視聴者はこの番組を通して、日本の中に住んでいてはタブーとして触れにくくなっている天皇制についての意見の交流の大切さを再認識したり、日米合作の遺産である官僚制についても、現代の政治を見つめる大きな視点を得ることができる。内容的に「国際理解」を形成するよりも、「国際理解」のための応用的視点を得る番組であり、その分、初期教育的な位置づけには難しい番組といえる。(松野 直江)

Ⅵ. 「国際理解」形成からみた学校社会科教育

以上四種の番組検討を通して、それぞれの番組における「国際理解」形成の論理をある程度明らかにすることができた。

「異文化体験番組」では、「静的な異質性」から「動的な共通性」への展開が基本的構成要素となり、伝統的な生活における文化の構造と、それを揺るがす近代文明との狭間に生きる人々の生活が主な理解内容となっている。「地域問題番組」では、取り上げた外国の一地域の問題を、日本との対比やより一般的な脈絡のもとでの解説を基本的構成要素とすることにより、われわれにもかかわりのある共通の問題として理解することが主な理解内容となっている。「人物物語番組」では人物の意図、行為、結果からなる物語的展開を基本的構成要素とし、社会環境の違いやそれに取り組む人物の理解を直接の理解内容としながらも、視聴者に独自の読みの可能性をも提示している。「意見陳述番組」では、「地域的固有性」が歴史的に見れば実は「世界的普遍性」であったという再発見の原理を基本的構成要素とし、歴史的な視点からの国際問題理解が主な理解内容となっている。

四種それぞれに「社会科教育」としての教育的意義を見出すことは可能である。「異文化体験番組」を見ることから社会の構造と発展の動態が理解でき、「地域問題番組」を見ることから外国の一地域の問題をわれわれの脈絡に引き付けて理解できる。また「人物物語番組」を見ることから国際問題や地域的問題への独自の追究のきっかけを得ることができ、「意見陳述番組」を見ることから国際問題に対する新たな視点を獲得できる。いずれも「社会科教育」としては本質的な、重要な諸側面である。

それでは、これらに対する「学校社会科教育」の固有性はどこに見出せばよいのであろうか。「異文化体験番組」では、TVから直接得られる知識以降の知識の発展段階に関すること、「地域問題番組」では、社会の問題事態に対する想像力に関することが、TV番組の及ばない領域であることが析出された。また「人物物語番組」では視聴者が独自な追究を始めた以降の段階に対応していないこと、「意見陳述番組」では初期的な段階における理解形成に対応していないことが析出された。このことから、現段階では「学校社会科教育」に三つの固有性を導き出すことができる。

第一に、ある若干の情報をきっかけに、自らの社会探究を始めることに動機付けられた学習者の指導という領域である。TV番組は極めて理解しやすい情報をもとに社会の構造や発展、問題事態を描き出すが、それに動機付けられた学習者の社会探究指導という意味での「社会科教育」は行わない。このことは逆に、このような指導を行わない「学校社会科教育」は、その固有性を自ら放棄するものであり、そうなれば学習者は学校に行くよりTV番組を見る方がよほど効果的な「社会科教育」を受けられることを意味する。

第二に、本小論で取り上げた4種の番組に対応した四つの学習内容の相互交流という領域である。TV番組では四つそれぞれの番組世界の中で自己完結したような構成がとられ

ていた。この四つの内容は、社会科教育としての「国際理解教育」に不可分な二つの対立軸から成り立っており、四つそれぞれの要素が理解内容に含まれていることを必要とする。

第三に、当然ながら「カリキュラム構成」という領域である。TV番組は「教育」としては非意図的なので顕在的なカリキュラムが存在しない。どの段階の学習者に「人物物語番組」や「意見陳述番組」が必要なのかを明示していない。これに対し、学習者の「国際理解」に関する理解段階に応じて、より発展的な理解を促す働きかけをするような意図性こそ、「学校社会科教育」に固有の領域として存立し得ると考えられる。（吉川 幸男）

注

- 1) 鬼塚喜隆「TV視聴による歴史知識成長－歴史解説型番組の場合－」『教育学研究紀要』第41巻第2部、1995、は、このアプローチによる知識論的分析まで踏み込んだ研究である。
- 2) 社会科教育研究としての概念整理の必要性については、田淵五十生「国際理解教育・グローバル教育の研究」『社会科教育学研究ハンドブック』明治図書、pp.410-412、でも指摘されている。
- 3) 大津和子『国際理解教育』国土社、1992、pp.196-204、では、日本の「国際理解教育」が他国・他文化理解中心にとどまり、また日本の「開発教育」が「開発問題」だけを学習する一面的な理解に陥りやすいの対して、「地球市民を育てる教育」という観点からの「グローバル教育」の必要性が指摘されている。このことは、どこまでも個別性を内包する個々の「社会」の理解に対し、「人」の理解が普遍性を内包することから、両者の相互関係の重要性を暗示した指摘であると考えられる。
- 4) この対立軸は、永井滋郎『国際理解教育に関する研究』第一学習社、1985、pp.372-373、において「国際理解教育におけるもろもろの理論や実践」が、①文化理解的アプローチ、②問題解決的アプローチ、の二つに大別できるという指摘と深い関連がある。文化理解的アプローチは静的であり、問題解決的アプローチは動的であるため、「国際理解教育におけるもろもろの理論や実践」をめぐっては何らかの形でこの対立軸が議論されてきたと考えられる。実際、従来は専ら静的なアプローチとみられてきた「異文化理解教育」も近年では学習内容に「その社会が抱えている問題を取り上げること」の重要性が指摘されている。（鴛原進「社会科異文化理解学習の改善－『世界文化：グローバル・モザイク』を手がかりとして－」『社会科研究』46号、1997、pp.38-39）